

■帯広畜産大（2020年リーグAブロック2位）

曇り時々雨の天候で、最高気温も21.8度と猛暑も落ち着いた8月22日の帯広。同市稲田町の帯広畜産大近くの公園で、アメフト部の玉川雄太主将（4年、尾道北高）ら3人が出迎えてくれた。北星学園大と同様に部外者が大学構内に入れないため、グラウンドに代わっての待ち合わせ場所だ。

6校を2ブロックに分け、3校ずつのリーグ戦と両ブロック首位同士の優勝決定戦で争った昨季。帯広畜産大は、大学のコロナ対策で練習開始が遅れ、初戦の北大戦を棄権した。2戦目はWR山村達也（当時3年、江別・大麻高）の活躍などで札幌学院大に3年ぶりに勝利したが、結局1勝1敗のブロック2位に終わった。1部実力校の存在感は示したものの、不完全燃焼のシーズンだった。

そして2021年シーズン、編入生の3年生2人と新入生4人を加え。選手14人とスタッフ11人でスタートを切ったが、今季も再びコロナに翻弄された。5月から6月にかけての2度目の緊急事態宣言期間中は練習中止を余儀なくされ、6月21日過ぎから全体練習を再開したが、7月12日に予定していた北海道大とのオープン戦は、札幌のチームを招いての試合に、大学のグラウンド使用許可が得られずに中止になった。玉川主将は「1部上位の北大と対戦して1、2年生に経験を積ませ、上級生も力を確認したかった」と残念そうに振り返った。

7月24日、釧路公立大へ出向き、試合形式の合同練習を行った。「1年生には初めての実戦だった」と玉川主将。「今年のチームは雰囲気良く、チームワークも良い」と手ごたえを感じ始めた。しかし、7月30日、大学が新型コロナウイルス感染症予防のための活動基準の見直しを発表し、それまで条件付きで認めていた課外活動を全面禁止とした。畜産大の学生に相次いでウイルス感染者が見つかったための大学側の決断だった。

個人の筋力トレーニングなどを黙々と続ける日々。玉川主将は「9月12日のリーグ戦初戦の北星学園大戦には何としても間に合わせたい」と願うが、全体練習再開の見通しは不透明だ。昨年の札幌学院大勝利の自信を胸に「QB貫井哲平（4年、千葉・船橋東高）と山村のホットラインもある。北大や北海学園大にも勝ちたい」と玉川主将は思いを募らせた。

8月27日、政府は北海道に3度目の緊急事態宣言を発令した。その前日の26日、帯広畜産大は「本学の対応について」を発表した。緊急事態宣言発令でも7月30日付の活動基準に変更は無いという内容で、課外活動は全面禁止のまま。緊急事態宣言は9月12日までが期限となる。



帯広畜産大の正門前に立つ右から玉川主将、山村選手、岡崎選手